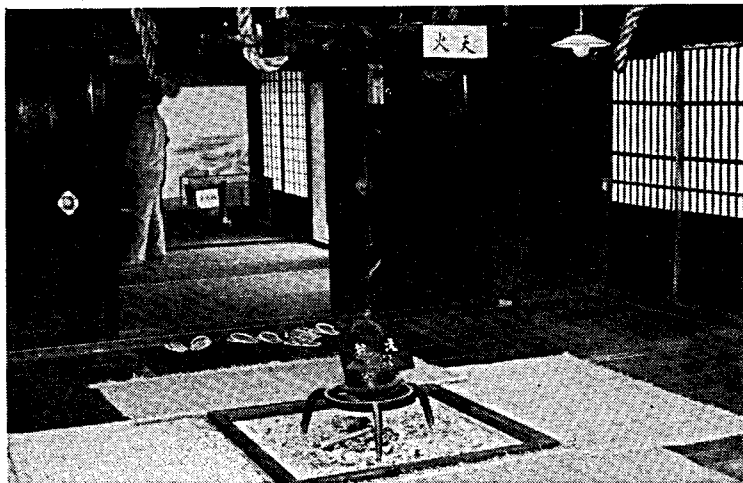


館・園紹介
No 29

民族資料館 荘川の里 荘川村立



ふるさとの生活を今に伝える民家内

〒501-54 大野郡荘川村新淵

TEL <05769> 2-2681

「荘川造り」が いまも静かにただびむ

荘川の民家は、古くから「寄棟式入母屋造り」通称「荘川造り」といわれるもので、隣村の白川郷の合掌造りや富山県五箇山の「切妻合掌造り」とも様式、構造、間取りなどに多くの相違点が見られた。つまり、左右の妻の下は、採光のために屋根の一部が切って持ち上げられ、板戸、あるいは紙障子が立てられており、この窓を鼻小屋と称して、本屋根との境に茅や藁の束を一系列に連ねた防雨工事が施されて「セイギャ」と呼ばれているのが特徴である。

荘川村では、昭和47年10月より事業を施行し、村の教化地区とし、村民の憩場所、そして村内の貴重を文化財産の保護、ひいては一般観光客への開放をねらいとして、「荘川の里」をつくられた。江戸時代の末期に建てられ、百数十年の星霜に耐えてきた村内の民家「寄棟式入母屋合掌」2軒と、「板柱切妻2階建」1軒の、民家3軒を、荘川のほとりに移築再現し保存したもので、民家内には、明治初期より村内で使用されてきた農耕器具、生活用具、木材運搬用の馬車、馬ソリ、手ソリ、大八車、養蚕具など、それに、平家落武者のヨロイ、カブト、火縄銃、モミスリ器、あるいは古銭、書物、仏壇と、遠き荘川びとのくらしを語る民俗資料が数多く展示されている。

汚れなき山と水に恵まれた自然のふるさとの中で、いまも静かにただびむ荘川の民家と、民俗資料の数々、わたしたちは、ただ物珍らしい過去の物として接するだけでなく、これらの物を通して、祖先びとの生活を知り、ヒトの知恵を学び、そこから、明日に生きる生活術を読みとらなければいけない。

わたしたちにとって「ふるさと」とは、そのあるべき姿は？、自然と調和した人間の未来の生活像は？、「荘川の里」も、ただ物見遊山の観光客として訪れるだけではなく、わたしたちひとりひとり

が、日本のいま直面している問題も、じっくり思索してみる場所として訪れたいものである。

開館は、8時30分 — 17時まで、毎週月曜日休館。大人200円、小人150円、国鉄・名鉄バス名一金線「牧戸」下車徒歩約15分。濃飛バス庄川線「新洲」下車徒歩約5分。

(写真、庄川村役場提供、文責 小野木学芸員)



寄棟式入母屋造り 旧木下家



旧山下家の全景

許されない「研究部門の廃止・研究員の解雇」

死んでいくのか モンキーセンターヨ!

岐阜の博物館 編集部

すでに各種新聞紙上でも報ぜられているように、昭和51年2月2日、財団法人日本モンキーセンター常務理事宮地伝三郎所長は、何の予告もなく突然に、「研究部の廃止」と「研究員の解雇」を通告した。その根拠として「財政状態の悪化」と「霊長類の研究をめぐる諸情勢の変化」をあげている。そして今後は、「霊長類に関する専門博物館」として存続させるということである。

博物館は死んで行くのか!

いったい博物館とは何であったのか、また何であらねばならないのか。宮地伝三郎氏をあげるまでもなく理事者の中には、日本が誇る指折りの研究者がおられるはずなのに、博物館学のいろはの常識のかけらもみられないのだろうか。博物館の資料収集・保存・展示あるいは普及教育活動の基盤には、学問的な研究活動が欠くことのできない絶対必要条件であることぐらいは、先刻ご承知のはずである。しかも、日本モンキーセンターの研究部門こそは、日本サル学を誕

生させ育てあげてきた原点であるだけでなく、資料収集の中核でもあったはずである。研究活動という科学的な基盤があったからこそ、従来の附属博物館や動物園そのものも、地域社会の教育・文化の向上の一翼を担うことのできる機関として社会的にも高い存在価値と評価を得てきたのであった。研究部門こそは、理事者側が今後の方向として打出した「霊長類に関する専門博物館」たるための心臓部であることは当然すぎることだし、これまでもその面で多大の実績をあげまた貢献してきたのだった。

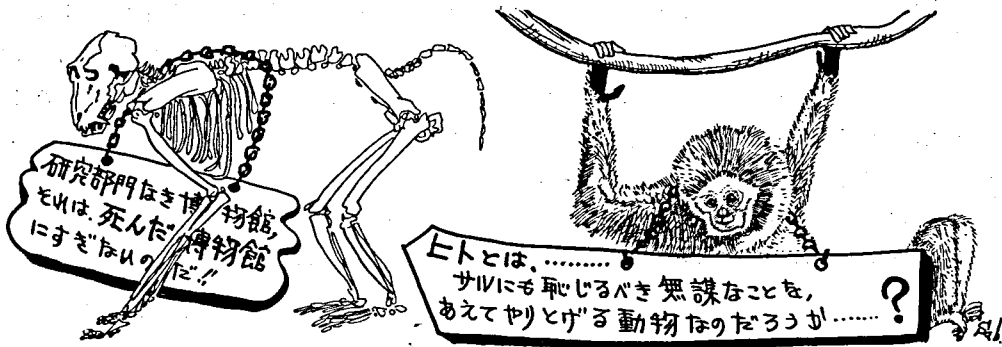
学者理事の方々は、今回の研究部廃止と研究員解雇という非民主的無謀な行為が、博物館そのものの自殺行為であることを充分ご承知のはずである。ご承知でないとするなら、ことは、ただ日本モンキーセンターだけの問題ではなく、日本の博物館界も、今だ明治維新以前の暗黒時代といわねばならないし、学者の博物館学無知にあきれるほかはない。

今度の措置については、再建委員会が設けら

れ、委員の中には日本一流の学者も多く参加されていたのである。その方々が、博物館学の何たるか、博物館機能の原則をわきまえておられなかったとするなら、もはや日本の博物館づくりの現実には悲劇的というより仕方がない。明治百年、置県百年等を記念して、全国的に博物館づくりが進められているが、その開館後の運営については、充実した普及教育活動も望めない。建物ができ、そこにいくばくかの物が展示された陳列場、見せ物小屋に終始するのがおちである。

これが文化精薄国の現実か

霊長類の研究をめぐる諸情勢の変化とは具体的にどんなことなのか。国立霊長類研究所がで



きたからといって廃止していいものか、むしろ協力し合い誘発しあい、独自の研究活動をこそ推進すべきであるし、すでに述べたように、研究活動こそは博物館存在の生命である。それとも、サルの見せ物小屋として、ただ珍奇なものを一般大衆に公開し、入園料で利益をあげればそれでよいというのだろうか。金持ちにはなったものの、今だに世界の国々から尊敬されることのない文化精薄国家に甘んじようというのだろうか。

財政状態の悪化についても、理事者側の宣伝による「年間一億円の赤字～数億円の累積赤字～云々」は作られたものではないだろうか。内部事情に詳しいものなら、だれもがこれを誇張した赤字宣伝であることは知っている。昨年一年間では約280万円の赤字、過去19年間で約1千万円の累積赤字が報告されているとも

いわれている。いずれにしても、研究部を廃止したり研究員を解雇しなければならない理由は見当らないし、しかも、これだけの重大な決定事項を、各理事が直接顔を合わせ、一堂に会して議論もしなかったとするなら、非常識というよりも、学者理事の良心すら疑がわれる愚挙、非民主的な珍事怪事件といわねばならないだろう。

日本モンキーセンター、おまえまでもが死んでいくのか。日本の博物館界にあって、その歴史の重みとユニークな存在、これまでの輝やかな実績、これからの博物館界での指導的位置の重みを考えるとき、今回の問題は、ただひとり日本モンキーセンターだけの問題として見す

ごすわけにはいかない。博物館界全体にかかわる、文化精薄国日本の現実を打破するための試金石でもある。日本という国は、学者までもが、真実と正義を追いことすら忘れてしまった悲しい国であったのか。

一方的な通告で、理事者側が、当事者との話し合いを持とうともしないとは、しかも、同じような研究者出身の理事が多々あるというのに、とても常識では判断のつかない無謀さぶりである。岐阜県博物館協会の会員諸氏は、この問題をどう考えられますか。

理事長 田村 剛氏、常務理事 宮地伝三郎氏、その他の理事各位に、どんどん抗議の声を集中させようではないか。

これでは、秩序あるサル社会にも恥かしい。人間社会のあまりにもおろかな恥ではないか……と。

梅棹 忠夫 著 民族学博物館

博物館は精神の運動する空間なり

ベストセラー「知的生産の技術」をはじめ、独自の雄大な仮説「文明の生態史観」あるいは「東南アジア紀行」「地球時代の日本人」などの数々の著者として名高い梅棹忠夫氏は、現在「国立民族学博物館」の館長としてご活躍されている。

民族学・人類学・比較文明論を専攻されている氏が、世界各地をめぐる精力的に研究活動されるうちに、「日本にも人類学・民族学の博物館をつくらねばならない」と考えられるようになったのは、当然の帰結でもあった。しかし、日本を代表される一流の学者の夢でありながら、その実現までには、じつに20年もの年月を要したのだから、いかに日本では、博物館の社会的意義が忘れられ、博物館行政も貧弱であるかがうかがわれる。

本書は、1956年7月12日付の京都新聞に「京に民族博物館を～中東学術調査展を機に」と題する文章で、設立希望を表明されて以来、いろいろな機会に民族学博物館について書かれたり話された文章を集められたものである。まえがきで、「この本は、この博物館の成立にふかくかかわりをもった一人の人間の、私的な記録である」とことわっていられるが、集められた本文の文章は、発表年月日順にしてあり、文章毎に解説が詳しく付けられ、背景が読みとれるようになっていて興味つきない。

これからの博物館建設運動の指針となる格調高い内容ばかりで、一人の人間の、私的な記録どころか、博物館学の実践的教科書の一品である。本書を通して、国立民族学博物館の成立のいきさつや概略を知るだけでなく、今日の博物館が当面している問題点、あるいは未来に向かつて解決しなければならない課題など、博物

館学のいろは……の原理をこそ私たちは読みとらなくてはいけない。

ことに、「民族学と博物館」と題された文章は、岩波文化講演会の速記原稿にすこし手をいれられたもので、かつて雑誌「図書(293号)」にも掲載されたもので、すでにお読みの方もいるかと思われる。ただ民族学にかかわる博物館だけに限った理念だけではなく、ここには「博物館を精神の場、精神の運動する空間」としてとらえておられる梅棹氏の博物学思想があふれている。わずか30ページばかりの文章ではあるが、これはすばらしい博物館学概論であるし、博物館やその類似施設等にかかわりのある人間全てが目を通さなければならぬ原典でもある。

1. 民族博物館がほしい からはじまって、
4. ヨーロッパの民族学博物館、5. 民族学研究博物館の構想 6. 「収集団」から「博物館へ」
7. 博物館創設への第一歩 8. 民族学と博物館
9. 創設準備会議のころなど、全部で15の文章が集められているが、本書は、岐博協会員諸氏はもとより、むしろ「文化的なことにはあまりお金をださない」という定評下にある日本の企業家、経済界の人々にこそ説まれるべきである。さらに、国や都道府県、市町村等の文化行政担当者の方々にこそ説まれるべきものでもある。国立の民族学博物館だからこそ……できるんだ……と思ひ前に、まず発想をかえ、真剣に博物館事業を推進する気構えが要求されるのは、博物館活動の実践家よりも、むしろ政治家であり行政官である。

梅棹 忠夫 著 民族学博物館

講談社刊 1,200円

(編集部)

濃飛の文化財 第7号 出る

岐阜県文化財保護協会の機関誌「濃飛の文化財」第7号が出ました。「文化財保護法の主な改正点と当面の課題をめぐって」県教委文化課長 吉田 豊氏をはじめ、本協会顧問の兼村虎之助氏「関市千正古墳」本協会監事の石川良宣氏「伊吹山より杖衝坂への道」同藤田松太郎氏「瓢ヶ岳と高賀神社の由来」同松田 充氏「全国活動点描」本協会副会長 郷 浩氏「不破関は城郭か関所か」本協会理事 吉田幸平氏「白山権現の本地垂迹展開考」同小野木三郎氏「自然の文化財を大切に」など、読みごたえのある力作がズラリと出ている。岐阜県文化財保護協会への加入申込みは、

〒500 岐阜市司町岐阜総合庁舎内 岐阜県文化財保護協会 TEL 65-4466 へどうぞ。

岐阜県歴史資料館の建設スタート

県では、県史の編集集中に集め保管中の古文書、古記録、複写本、撮影フィルムなどや、明治以降の県関係の公文書を収蔵する目的と、県下に広く散在、埋もれている各種古文書や歴史資料の収集、保存を目的とした「県歴史資料館」の建設を計画し、金華山麓の元県消防学校跡に、鉄筋コンクリート造り三階建、延べ1820㎡の同資料館を建設中で来年3月完成予定。

タウン情報ぎふ 2月号で 博物館へどうぞの特集

市民生活とレジャープランのための情報誌として、大垣で誕生した「タウン情報ぎふ」は、生活の情報辞典としてユニークな月刊雑誌として登場しましたが、1月25日発行の2月号では、「ザ・特集、博物館へどうぞ」を4ページにわたり紹介している。本協会発行の「博物館

へどうぞ」(絵・構成 小野木三郎学芸員)のポスターを資料に、その1飛騨編、その2美濃編と各2ページ建てのイラスト地図で紹介している。同誌は、市民参加の告知板として、岐阜の人々に知ってもらいたいこと、知らせたいこと、知りたいことなど巾広く取り上げています。協会下の各館等々の催し物、特別展、行事その他の情報をどんどん提供しましょう。無料で掲載してくれます。ニュース送付先は、

〒503 大垣市寺内町3の123 中央デザインセンター タップ タウン情報ぎふ編集室まで
(TEL <0584> - 78 - 5165)

特別展 甘原窯展開催中！ 岐阜県陶磁器陳列館で

甘原窯は、明治の末に、多治見市甘原東山で、小島音吉氏が独立創業した焼きもので、操業と休業を繰り返して、大正八年、苦心経営の甲斐もなく、ついに窯の火を消したものである。

あらゆる技法を求めて試作の域を出ないものもあるが、甘原特産の石灰石を応用した優美な細調、あるいは絵付の巧みさは他に例がなく、昭和にさきがけて、和陶の世界に新風を吹きこまんとした焼きものである。今回、岐阜県陶磁器陳列館では、特別展「甘原窯展」を去る2月5日より3月末日まで開催中。どうか、おでかけください。

保古自然館5月にオープン！

岐阜県は、東濃保古の湖周辺に「恵那山国民休養地」を建設中であるが、主要教化施設のひとつ「保古自然館」が、本年5月オープンすることとなった。鉄筋コンクリート平屋建て、309平方メートルの建物は完成し、現在展示品製作作業中。展示内容は、岐阜県の植生を中心素材として、人と自然のかかわりを示すもので、「植物社会の姿」「自然と人」「今日から明日へ」の三つの中心テーマが考えられている。入場は無料。

事務局より

★昭和50年度会費未納の方は至急納入を！

会計年度末を迎えました。未納の館園および個人会員の方は、大至急納入下さい。

公立館園 2,500円 私立館園 2,000円

個人会員 1,000円

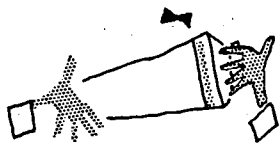
送金は郵便振替 名古屋 70106 で！

★東海地区博物館連絡協議会総会岐阜で開催

6月ごろ、上記東海博連絡協議会総会が、岐博協の当番開催でもたれます。細部は実行委員会にて検討中、後日お知らせしますが、岐阜県博物館の開館後ですので、見学会を兼ね総会会場は県博を予定しています。

★秋、日博協の全国大会 高山で開催予定

日本博物館協会では、51年度の全国大会を今秋高山市で開催の予定。目下準備検討中です。



図書紹介

◎明治神社誌料 全三巻 別冊索引一巻

本書は、明治45年に刊行されたもので、当時の府県社580余社、郷社3450余社に関する資料を収載している貴重な文献で、各社の所在地、社格、神社名、祭神、由緒、境内神社、例祭日、氏子戸数、社記録などを詳細に掲載している。60余年前の刊行物で、現在では入手不可能、そこで今回講談社が原本のまま復刻刊行したもので、索引一巻を新しく作成したもので、全三巻別冊索引一巻付セット価格48,000円、5ヶ月分割払い価格50,000円、歴史、民俗、あるいは郷土館の基本図書としておすすめます。

韓国美術五千年展へお出かけを！

一般国民の歴史への関心が高まっている今日、古代日本の成立と最も深いかわりをもっているのが韓国であることに目を向ける必要があります。今回、ソウルの韓国国立中央博物館、公州、慶州の各博物館の協力により、京都国立博物館を会場に、「韓国美術五千年展」が開かれています。

主な展示品は、先史時代の描文や彩文土器、青銅製鏡、三国時代から統一新羅時代にかけての逸品、金冠、金の耳飾、高杯、舍利容器、それに金銅弥勒菩薩、金製阿弥陀如来坐像、金銅如来三尊像、あるいは山水図帖、李巖の犬図、虎図などであるが、日本文化の原点を見る思いである。期間、2月24日(火)～4月18日(日)まで、当日券大人650円、高大生450円、小中生200円。

春休みには、ぜひお出かけ下さい。

編集後記

◎東海博連絡協議会総会、県博の開館、日博協全国大会と、昭和51年度は、岐阜県博物館協会にとっては、更に飛躍の年となることでしょう。春の訪れとともに、岐博協の総会も開かれます。案内がありましたら、万障お繰り合わせのうえ、何はともあれ参加下さい。県下の博物館人の集いとして、また明日の岐阜県文化をささえる床の下の力持ちであることを自負しつつ……………

◎不況の訪れとともに、またもや全国的に、あるいは県下でも、地道な教育活動や博物館活動、あるいは文化財保護や自然を守る面での活動にしわ寄せが来ているのではないのでしょうか。いつになったら文化事業に目を開いた経済大国に変身できるのでしょうか。モンキーセンターの問題は、ただひたすら財団法人モンキーセンターだけの問題ではないはず。 (Sab.)